

—いま、^{かえ}還る場所—

新「山種美術館」 2009年10月1日に開館

山種美術館(館長:山崎妙子 所在地:東京都渋谷区広尾 3-12-36)は、2009年10月1日に渋谷区広尾(JRまたは東京メトロ恵比寿駅より徒歩10分)に開館いたします。

新築されるビル(ワイマツ広尾)は、所蔵品にふさわしく品位と格調の高い建築(地上6階・地下1階建て)で、地下1階に常設展示室、企画展示室、ミュージアムショップを、地上1階部分にはロビー、ミュージアムカフェ(Cafe 椿)、受付を併設します。

創設時の山崎種二の思いでもある「美術を通じて社会、特に文化のために貢献する」という理念を継承しつつ、さらに多くの方々楽しんでいただける美術館を目指します。



新美術館外観

(左) 駒沢通り北側から見た外観 (右) 駒沢通り南側から見た外観

新美術館は、恵比寿駅から青山方向に向かう駒沢通り沿いの閑静な住宅地にあり、周辺は教育機関、大使館、社寺なども多い文化的な香りの漂う都内有数の文教地区です。

設計は、数多くの美術館を手掛けた日本設計が担当。日本文化に貢献する美術館という当館の理念を受け、現代において忘れられがちな文化の本質に立ち寄り、

「品位と格調のある建築」「時代に流されない普遍的な価値」「ゆとりを感じられる居心地の良い空間」をキーワードとして設計を進めました。外観は、美術館らしくなおかつ周囲に溶け込むような佇まいが感じられ、短冊状に連続する自然石の重なりの中に1階のロビーだけが見える構成となっています。

解放感あふれるロビーから、地下1階の展示室へと至る階段脇の壁面(ロビー入口正面)には、加山又造の陶板壁画《千羽鶴》が常設され、幅広い所蔵品で定評のある美術館の新しい顔となります。

地下に位置する展示室は、企画展示室、常設展示室と合わせて、三番町の旧美術館の約2倍のスペース(約650㎡)でと心ゆくまで美術鑑賞ができるように設計されました。企画展示室は、天井高3.8m、総長40.5mの壁面展示ケースで屏風作品もゆったりと展示され、総長92.5mの展示壁面(可動壁使用最長時)には大型作品も自由に陳列が可能となりました。常設展示室では、速水御舟の作品を中心に当館の所蔵品の中でも特に人気の高い作品数点を、年6~7回展示替えして公開します。重要文化財の《炎舞》や《名樹散椿》は、年に1回、定期公開を予定し、より多くの方に近代日本画に親しんでいただこうと考えています。

また、最新の照明器具の開発には特に力を注ぎ、光源が鑑賞の妨げにならない独自の照明計画を実現させました。作品をやさしく包み込むような自然な光環境で、日本画を心ゆくまでご覧いただけます。

山種美術館は開館以来40余年にわたり、さまざまなテーマで所蔵品の近・現代の日本画を展示してきました。

新美術館では、理想的な憩いの環境づくりと質の高い展覧会の提供を目指します。

豊かな芸術に触れ、自分自身をかえりみながら新たな気持ちになり、そしてまたここに戻ってきたくなる—そんなとっておきの場所にしたいと願っております。



加山又造作陶板壁画《千羽鶴》のあるエントランス

◆ 山種美術館について

【沿革】1966(昭和41)年7月、日本初の日本画専門の美術館として日本橋兜町に開館しました。創立者山崎種二が「絵は人柄である」という理念のもと、作家と直接交流し蒐集、寄附した美術品を核とするコレクションです。その後、1976(昭和51)年には、二代目館長の山崎富治が旧安宅コレクションの速水御舟作品105点を一括購入。それまで所蔵していた作品と合わせて120点の御舟作品を所蔵し、「御舟美術館」として親しまれてきました。2006年には、開館40周年を迎えています。

【所蔵品】明治から現在までの近・現代日本画を主として約1800余点を所蔵。所蔵品は特定の流派や作家に偏ることなく、古画、浮世絵、油彩画なども含まれています。岩佐又兵衛《かんじょうかんぎくす 官女観菊図》、椿椿山《つばきざん 久能山真景図》、竹内栖鳳《はうはんびょう 班猫》、速水御舟《えんぶ 炎舞》《めいじゆちりつばき 名樹散椿》の5点の重要文化財、酒井抱一《さかいほういつ 秋草鶉図》などの重要美術品を所蔵。また、《なるとだいご 鳴門》《しんしん 醍醐》など戦後の院展出品作のほとんどを含む、135点の奥村土牛コレクションでも知られています。横山大観《しんしん 心神》《しんしん 作右衛門の家》、上村松園《かめた 砧》《しんけい 新蛭》、小林古径《こけい 清姫(8面連作)》《かかく 菖蒲》、村上華岳《かかく 裸婦図》、東山魁夷《かいいとしく 年暮る》などは、近代日本画の発展に欠かせない作家の作品です。



竹内栖鳳《班猫》重要文化財
1924(大正13)年



奥村土牛《醍醐》
1972(昭和47)年



東山魁夷《年暮る》
1968(昭和43)年

◆ 山種美術館のロゴについて



「山種美術館」のロゴは、《ぬかたのおおきみ 飛鳥の春の額田王》など歴史や文学を題材にした人物画でつとに有名な、日本画家、安田靫彦(1884-1978)が揮毫したものです。

日本や東洋の古美術を研究し、理知的な構図と典雅な色彩、そして緊張感のある線描による独自の芸術を開花させた靫彦ならではの書が、40数年にわたり山種美術館の入口を飾ってきました。

前館長・山崎富治が格別の想いをもって揮毫を依頼し、美術館のために書いていただいたこの文字を彫った看板は、新「山種美術館」のエンタンスで再び皆様をお迎えます。

◆ 加山又造 陶板壁画《千羽鶴》について

新「山種美術館」のエンタンスを飾る陶板壁画作品(縦2.5m×横4m×2面)は、日本画家、加山又造(1927-2004)



加山又造《千羽鶴》
1977(昭和52)年

かやままたぞうが二代目館長の山崎富治からの依頼により制作した作品です。新美術館の開館に際し、寄贈を受け、常設展示されることになりました。本作品は、加山又造が絵付けし、その義弟にあたる陶芸家・番浦史郎が活きた工芸美として創作することに腐心して焼き上げたものです。

金彩と釉薬が調和した大壁面は新「山種美術館」の新しい顔として、来館者を迎えることでしょう。

施設概要

新「山種美術館」概要

所在地：〒150-0012 東京都渋谷区広尾 3-12-36
(TEL:03-5777-8600 ハローダイヤル)

設計：株式会社 日本設計

施工：鹿島建設株式会社

延床面積：美術館部分 1230.95 ㎡

展示室床総面積：751.79 ㎡(一時保管庫、備品庫など含む。常設展示室 33.53 ㎡、企画展示室 620.26 ㎡、ミュージアムショップ 48 ㎡。現美術館の約 2 倍。)

施設構成：1 階 …ロビー、受付(チケット販売)、ミュージアムカフェ(Cafe 椿)、エレベーター
地下 1 階 …企画展示室、常設展示室、ミュージアムショップ

オープン：2009年10月1日 開館

* 新美術館開館記念特別展として「速水御舟—日本画への挑戦—」を(10月1日(木)から11月29日(日)まで)を開催いたします。(詳細は別紙資料をご覧ください。)

アクセス：下記ご参照ください



【徒歩でのアクセス】

JR 恵比寿駅西口・東京メトロ日比谷線 恵比寿駅 2 番出口より
徒歩 10 分

【バスでのアクセス】

■ 恵比寿駅前より

日赤医療センター前行都バス(学 06 番)に乗車、「広尾高校前」
下車徒歩 1 分(降車停留所③、乗車停留所④)

■ 渋谷駅東口ターミナルより

54 番のりば日赤医療センター前行都バス(学 03 番)に乗車、
「東 4 丁目」下車徒歩 2 分(降車停留所①、乗車停留所②)

***** 報道関係お問い合わせ先 *****

新「山種美術館」開館および「速水御舟—日本画への挑戦—」展に関するお問い合わせ、取材のお申し込み、
画像・データでの掲載資料などをご希望の方は以下の広報事務局までご連絡ください。

山種美術館・速水御舟展 広報事務局

楸ユース・プランニング センター内 担当 高橋 久美

TEL:03-3406-3411 FAX:03-3499-0958

E-mail: k-takahashi@ypcpr.com

〒106-8611 東京都港区西麻布 2-25-18 麻布パレスビル

山種美術館への直接お問い合わせ窓口

山種美術館：広報担当 高橋美奈子

〒150-0012 東京都渋谷区広尾 3-12-36

TEL:03-3239-5912(～7月31日まで) /新番号未定のため、8月1日以降は03-5777-8600にてご案内いたします。

E-mail: takahashi@yamatane-museum.or.jp

施設概要